

夏目漱石

鑑賞の統一と独立

鑑賞の統一と独立

アーサー・バルファアの書いた「批評と美」という講演を読んでみた。バルファアが本職外にこういう講演をしたことが余よの好奇心を釣つったので、わざと注文してそれを取り寄せたのである。

講演は短いものでわずか五十頁ページに尽きている。しかし彼自身が小序において断ったごとく、文字の使用方も議論の遣やり口くちもむしろ通俗に近いものである。そのうえ彼の到着した結論はついに消極的であった。けれどもそ

の消極的な点が余の感興を動かした。

住年余が英国に留学して、文学という茫漠たるものを研究している際に、作物の評価上、大いに彼此かしの差に迷って困却したことがある。たとえば向うむこうの人がことごとく許して傑作と見倣みなしているものが、こっちにはさほど思われなかつたり、あるいは微妙の音楽があるとして強しいられる詩歌に、何物をも迎え入れる耳がなかつたり、そんな矛盾が毎日のようにあるので、不愉快な日ばかり重ねていた。しまいには自家の味わうべきものに、他人の味覚を標準とするは顛倒てんとうである、文芸の翫賞がんしょうは善よかれ悪あし

かれ自分の持っている舌でやるべき仕事である、いくら信用してしかるべき男がいるにしても、この道ばかりは代理を頼むわけにいかないものだど悟った。

それから自分の立場を正当にするために、「趣味の差違」という題目の下にあらゆる類例を集めにかゝった。

類例の範囲は文学美術習慣道德その他いやしくも趣味の附着し得る^うかぎりあらゆる方面に涉^{わた}って取捨するところなく、集め得るだけのものを集めて、しかる後に概括的に論断を下すつもりであった。むろん出立点が国民により、時代により、流行により、年齢により、個人の性情

と教育によつて好尚こうしように差違のあることを根底から証拠立てだたいという希望であつたのだから、たとい思いどおりに計画は成就しなかつたにしても、結論のほうは例を集めるまえすでに半分はでき上あがつていたといつても差さ支つかえはない。当時余の反抗心はいわゆる権威あるトラジシヨナル伝統的な批評、もしくは他ひとの定めたる芸術的範疇はんちゆうによつて、雷同を強いられる屈辱を避けんがために起つたのであるから、今バルフォアによつて拮出ねんしゆつせられたる（美の標準は客観的に定めにくい、厳密にいえば人々別々であるといふ）すこぶる常套じょうとうな結論を讀んでも、当時余の

親しく経過した不安やら、この不安に次いで起った決断やらを憶おもい起さしめる点において余はすこぶる興味を感ずるのである。

同時に余は現在の自己を顧みて、ひそかに当年の余と比較する機会を、バルフォアによってサジエストされたような心持がする。余は近来若い人々と接触して、近代の作物さくぶつまたは現今の日本で出版になる創作について批判的の意見を交換することが多い。中には運よく一致することがある。たまには首尾よく先方で余の評価を容いれてくれることがある。けれどもさよう容たやす易く埒らちのあかな

い時が往々ある。そうして双方とも下ら^{くだ}ないで分れてしま^まう。そんな時に余はどうしても余に反対する若い人の評価が間違^{まちが}っていて、自分のほうが正しい気がしてならぬ。ある場合にはあれのいうことは飛^とんでもない誤^ご謬^{びゆ}だと確信することもある。新聞雑誌に出る月々の創作に對する批評などに関してはこの感が深い。余はこれ等^らの評壇を担任する専門家に対して悪意を抱^かくがためにことさらに自白するのではないが、希^{まれ}にはよくあんなことがいえたものだと思^{おも}うことさえあつた。

この心持の底には彼より我のほう^まが、評価において優^まる

っているという自信がある。彼も正しかるべきはずであ
 るし、我も間違っておらぬと公平に主張するよりも、彼
 は自家の見地を棄^すてて我に従うのが当然だという断定が
 ある。少^{すくな}くともそういう希望がある。それどころでは
 ない、彼にして我ほどの鑑賞力があつたなら必ず我に一
 致するだろうにという己惚^{うぬぼれ}がある。一言にして蔽^{おお}えば、
 作物の評価には統一がありたきものである。また統一が
 あるべきはずであるという気に充^みちている。しからざれ
 ば文壇は滅茶々々だという感がある。紛糾^{ふんきゆう}支離^{しり}の結果
 どうなるだろうという恐れが潜^{ひそ}んでいる。

昔は他の權威に堪えぬ結果、自己の舌で冷暖を味わねばならぬと主張して、人は人、我は我の極差別觀を立てようとした余が、それで正鵠せいこくを得たものと思ひ過ぎた今日までも立脚地を立て直す必要も見認めみとめないのに、自身はいつか冥々のうちに自分一個の批判を大いなる權威として他の鑑賞力のうゑに被かぶらそうと冀ねがっていた。しかもそれは正しいことと信じていた。

バルフォアの講義を読んで、今昔こんじやくの自分を同時に対照するの機会を得た時、余はこの自家頭上の矛盾を一變に意識した。意識しながらもどつちか一方に片付かたづけな

ければなるまいという理由を発見するに苦しんでいるのは不思議である。各自の舌は他の奪いがたき独立した感覚を各自に鳴らす自由を有^もっているに相違ない。けれども各自はついに各自かつてで終るべきものであるか。己^{おの}れの文芸が己れだけの文芸でついに天下のものとなり得ぬであろうか。それでは情ない、心細い。散りぐくばらくである。なんとかして各自の舌の底に一味の連絡をつきたい。そうして少しでも統一の感を得て落ち付きたい。消極的の結論に到着したバルフォアにはこの積極的な希望も暗示もないのであるか。余はこの暗示

を今確的に客観的に指摘するほど頭の焼点しょうてんが整わないのうらを憾みとする。そうしてこの矛盾を理路を辿たどって調和する力のないのを残念に思う。けれども一方において個人の趣味の独立を説く余は、近来一方においてどうしてもこの統一感を駆逐することができなくなつたのである。

(明治四三・七・二二)

日本文学電子図書館

鑑賞の統一と独立

著者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底本 「漱石全集 第8巻」角川書店
昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館